Ⅰ｜映画館での上映

2

公開本数・公開作品

公開本数

映画の公開本数は、1955年以降2004年までは大体550~650本を推移してきた。その後、デジタル化の進行とともに増加し続け、2013年には日本映画、外国映画とも500本以上が公開され、公開本数は1000本を越えた。2025年の映画公開本数は、日本映画694本、外国映画611本、合計1305本であった（映連発表数値）。前年の2024年（1190本）から大幅に増加している。

→fig.08

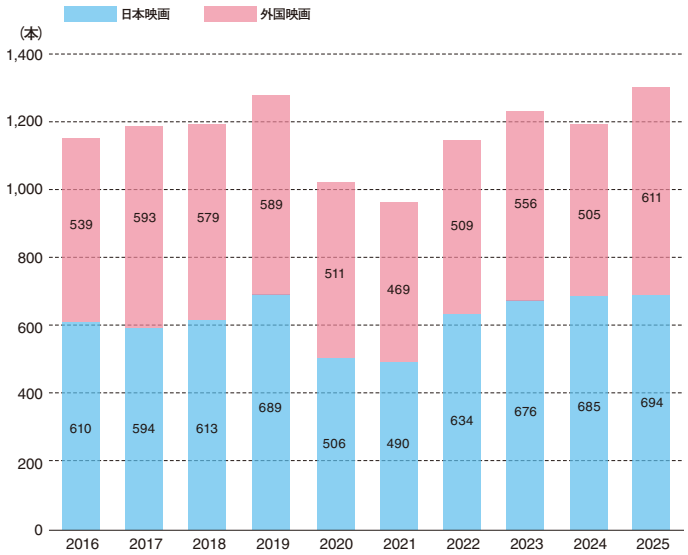
興行収入

2025年の興行収入は、日本映画が2075億6900万円（前年比133.2%）、外国映画が668億8300万円（前年比130.7%）、合計2744億5200万円で前年比132.6%と大幅な伸びを示しており、2000年代以降最高だったコロナ禍直前の2019年をも上回り、歴代最高を記録した。

興行収入における日本映画のシェアは75.6%、外国映画は24.4%となっている。日本映画が7割以上を占めており、コロナ禍以降の外国映画のシェアの低迷が続いている（2017-2019年は外国映画が45%以上であった）。一方で、2025年は外国映画の興行収入も前年比130.7%と日本映画と同レベルの増加となり回復の兆しがみえる。

→fig.09, fig.10

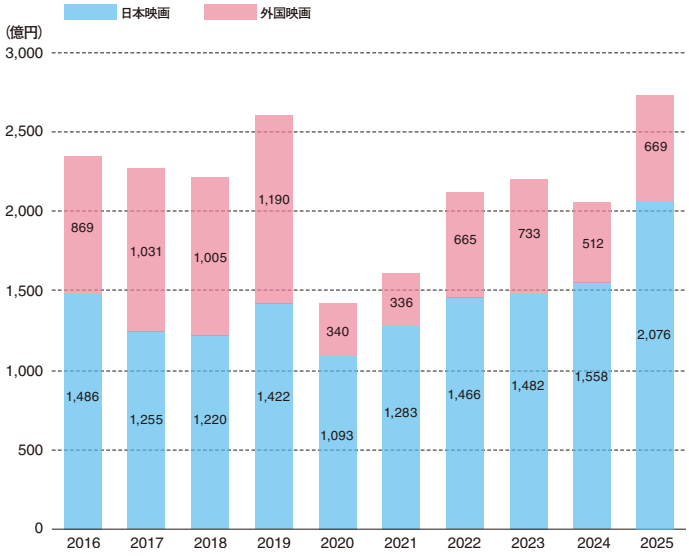
fig.08 公開本数の推移（2016-2025）



	公開本数			シェア	
	日本映画	外国映画	合計	日本映画	外国映画
2016	610	539	**1,149**	53.1%	46.9%
2017	594	593	**1,187**	50.0%	50.0%
2018	613	579	**1,192**	51.4%	48.6%
2019	689	589	**1,278**	53.9%	46.1%
2020	506	511	**1,017**	49.8%	50.2%
2021	490	469	**959**	51.1%	48.9%
2022	634	509	**1,143**	55.5%	44.5%
2023	676	556	**1,232**	54.9%	45.1%
2024	685	505	**1,190**	57.6%	42.4%
2025	**694**	**611**	**1,305**	**53.2%**	**46.8%**

—「日本映画産業統計」（日本映画製作者連盟）参照

fig.09 興行収入の推移（2016-2025）



	興行収入（億円）			シェア	
	日本映画	外国映画	合計	日本映画	外国映画
2016	1,486.08	869.00	**2,355.08**	63.1%	36.9%
2017	1,254.83	1,030.89	**2,285.72**	54.9%	45.1%
2018	1,220.29	1,004.82	**2,225.11**	54.8%	45.2%
2019	1,421.92	1,189.88	**2,611.80**	54.4%	45.6%
2020	1,092.76	340.09	**1,432.85**	76.3%	23.7%
2021	1,283.39	335.54	**1,618.93**	79.3%	20.7%
2022	1,465.79	665.32	**2,131.11**	68.8%	31.2%
2023	1,481.81	733.01	**2,214.82**	66.9%	33.1%
2024	1,558.00	511.83	**2,069.83**	75.3%	24.7%
2025	**2,075.69**	**668.83**	**2,744.52**	**75.6%**	**24.4%**

—「日本映画産業統計」（日本映画製作者連盟）参照

公開規模

コミュニティシネマセンターではネット上に掲載された情報等を元に独自に「公開作品リスト」を作成している。2025年の公開本数は日本映画673本、外国映画736本、合計1409本（ODS含）という数値を得ている。映連発表の数値は日本映画694本、外国映画611本、計1305本（ODSを加えると1521本）となっている。かなり大きな開きが出ているが、この要因としては以下のことが考えられる。

近年、旧作のデジタルリマスター版の再上映、特集上映の全国巡回が急増しており、どこまでを「公開作品」としてカウントするかによって、公開本数に差が生じる。コミュニティシネマセンターでは、デジタルリマスター版を中心に上映（配給）権を取得して巡回（複数の映画館へ配給）されているものは原則として「公開作品」としてカウントしており、2025年の外国映画の公開本数736本のうち、旧作のデジタルリマスター版のリバイバル上映と特集上映は249本、約34%を占めるに至っている。特集上映の中には、数年前に上映した作品に新たにデジタルリマスターされた作品を追加して、「●●映画祭2025」といった形にして巡回（配給）されるものもあり、何を「公開作品」とするかを判断するのは容易ではない。また、映連発表ではODSの上映本数が邦画（日本映画）だけで132本に上っているが、コミュニティシネマセンターでは30本程度しか把握できていない。

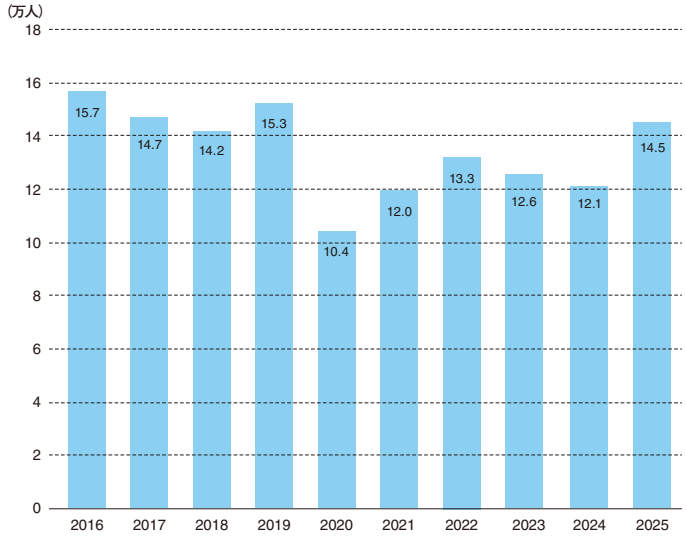
両者の数値の差は気になるところではあるが、前年からの継続性を鑑みて、以下ではコミュニティシネマセンターで得た数値を元に公開作品の中味を見てみる。

公開規模

2025年に「300館以上」で公開されたのは、日本映画87本、外国映画29本であった。

日本映画では370館以上で公開された作品は、400を越える映画館で公開され、実写映画歴代最高記録を更新し続けている『国宝』（6月）を筆頭に、興行収入391.4億円をあげた『劇場版「鬼滅の刃」無限城編 第一章 猗窩座再来』（7月）、100億円を越えた『名探偵コナン隻眼の残像（フラッシュバック）』（4月）や『劇場版「チェンソーマン レゼ篇」』（9月）、また、『映画ドラえもん のび太の絵世界物語』（3月）『映画クレヨンしんちゃん　超華麗!灼熱のカスカベダンサーズ』（8月）といった定番作品などがあり、2025年もアニメーション映画は絶好調で

fig.10 1作品当たりの観客数の推移（2016-2025）



	公開本数（本）	観客数（千人）	1作品当たりの観客数（人）	前年比
2016	1,149	180,189	156,822	10,141
2017	1,187	174,483	146,995	-9,828
2018	1,192	169,210	141,955	-5,040
2019	1,278	194,910	152,512	10,557
2020	1,017	106,137	104,363	-48,149
2021	959	114,818	119,727	15,364
2022	1,143	152,005	132,988	13,261
2023	1,232	155,535	126,246	-6,742
2024	1,190	144,441	121,379	-4,867
2025	**1,305**	**188,756**	**144,641**	**23,262**

—「日本映画産業統計」（日本映画製作者連盟）参照

あった。また、人気ドラマの映画版『劇場版ドクターX』(24/12月)、『劇場版TOKYO MER 走る緊急救命室 南海ミッション』(8月)などが370館以上の映画館で公開されている。
外国映画では、『ミッション:インポッシブル/ファイナル・レコニング』(5月)、『アバター ファイヤー・アンド・アッシュ』(12月)、『ジュラシック・ワールド 復活の大地』(8月)といった話題作、『モアナと伝説の海2』(24/12月)、『ズートピア2』(12月)等のアニメーションなど13本が370館以上で公開された。300館以上で公開された作品は29本で昨年を上回っているが、興収を見ると、最もヒットした『ミッション:インポッシブル/ファイナル・レコニング』も52.8億円にとどまり、10億円以上の興収を上げた作品は12本となっている(日本映画は38本)。コロナ禍前の2019年には133億円の興収を得た『アナと雪の女王2』を筆頭に、25本の作品が10億円以上の興収を上げていたことを考えると、現状はかなり厳しいものがある。

2020年のコロナ禍以降、シネコンはそれまで上映しなかった多様な作品を上映するようになった。また、コロナ以前(2019年まで)は150館以上で大規模公開される作品のほとんどは「シネコンのみ」で上映されていたが、2021年以降はシネコン以外の映画館、ミニシアターでも上映されることが増え、その状況は2025年も継続している。シネコンとミニシアターの両方で公開される作品は、2019年は日本映画で104本(18%)、外国映画では125本(24%)であったが、2025年は日本映画で201本(30%)、外国映画では352本(48%)と倍増している。
かつては、シネコンで音楽やスポーツ関係「以外」のドキュメンタリー映画が上映されることはほとんどなかったが、2025年は『黒川の女たち』『小学校 それは小さな社会』、『104歳、哲代さんのひとり暮らし』『大きな家』といった話題を集めたドキュメンタリー映画がシネコンでも上映され、シネコンとミニシアターの上映作品における明確な線引きは薄れつつあるようだ。
そのような状況でも、ミニシアターでしか上映されない作品の割合はあまり変化していない。ミニシアターのみで上映される作品は日本映画では238本(35%)、外国映画では262本(36%)となっている。「49館以下」の小規模公開作品の489本(全公開作品の34%)がミニシアターのみでの公開となっている。
ミニシアターでしか上映されない小規模作品の中には、国際映画祭等で高い評価を得た作品や、世界的巨匠の作品、重要なドキュメンタリー映画、多くの若い作り手たちの野心的な作品が含まれている。旧作のデジタルリマスター版のリバイバル上映や監督の特集上映なども、その多くはミニシアターのみで行われている。

公開作品の種類

日本映画

2025年の日本映画の公開本数は673本と前年を大きく上回った。
その内訳は劇映画369本(25増)、アニメーション80本(17増)、ドキュメンタリー99本(10増)、公演やライブ等のODSが30本(23減)、特集上映(旧作のデジタルリマスター版含む)が95本と前年(55本)の倍増に近い数となっている。
2025年は『国宝』が公開された年として記憶されることになるだろう。2025年6月に公開され、2026年になっても上映が続き、実写映画の歴代観客数の記録を更新、内外の多くの映画賞を受賞した。アニメーションは相変わらず好調で、「鬼滅の刃」の新作『劇場版「鬼滅の刃」無限城編 第一章 猗窩座再来』(7月)は、400億円には至らなかったものの、歴代2位の391.4億円の大ヒットとなった。この2作品にけん引されるように、日本映画では10億円を越える作品が38作品に上った。
2025年のカンヌ国際映画祭では『国宝』の上映が話題になったが、ほかにも『8番出口』『遠い山なみの光』『見はらし世代』『ルノワール』といった作品が一挙に上映され、8月のロカルノ映画祭では三宅唱監督『旅と日々』がグランプリを受賞、前年の山中瑤子監督、空音央監督らに続き、日本映画の新しい世代の作り手が国際的に注目を集めた。『ルノワール』(早川千絵)、『今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は』(大九明子)、『ふつうの子ども』(呉美保)、『海辺へ行く道』(横浜聡子)など、子どもを描く女性監督の佳作も多くつくられた。コロナ禍の夏の高校生たちを描いた『この夏の星を見る』なども注目を集めた。
2025年は「戦後80年」という節目の年であり、これに関わる映画も公開された。沖縄の戦後を描いた『宝島』(9月)、原爆が投下された後の長崎を舞台とする『遠い山なみの光』(9月)、『木の上の軍隊』(7月)、『雪風 YUKIKAZE』(8月)、またアニメーション映画『ペリリュー 楽園のゲルニカ』(12月)などが大規模公開されている。
2025年も多くのドキュメンタリー映画が公開された。公開された99本のうち、52本がミニシアターのみで上映されている。
ドキュメンタリー映画では、第二次世界大戦末期の満州・黒川開拓団で行われた性接待の事実と帰国後の女性たちの人生を当事者たちの証言によって記録したドキュメンタリー『黒川の女たち』が注目を集め、徐々に公開館が増え、最終的に100館を越える映画館で上映された。
2023年の釜山、2024年のベルリン、2025年の山形と国際映画祭で上映され高い評価を得た、在日朝鮮人2世の映画作家・朴壽南(パク・スナム)と娘の朴麻衣(パク・マイ)が共同で監督した『よみがえる声』は、戦後から現在に至るまで差別を受け続けた在日朝鮮人、長崎、広島で被爆した朝鮮人被爆者を記録した重要なドキュメンタリーで30を越える映画館で上映されている。
東日本大震災から15年(2026年)を経て、自身の故郷である被災地を撮る若いつくり手が注目を集めた。石巻出身の佐藤そのみ監督のドキュメンタリー『春をかさねて』『あなたの瞳に話せたら』は大学の卒業制作としてつくられたもので、自主上映からスタートして、小規模ながら劇場公開もされ、話題を集めた。

fig.11　2025年に映画館で公開された作品の公開規模

日本映画

公開館数	2025		シネコンのみ	シネコン+ミニシアター	ミニシアターのみ	2024		シネコンのみ	シネコン+ミニシアター	ミニシアターのみ	2023		シネコンのみ	シネコン+ミニシアター	ミニシアターのみ	2019		シネコンのみ	シネコン+ミニシアター	ミニシアターのみ
300館以上	87	13%	79	8	0	67	11%	59	8	0	59	9%	54	5	0	43	7%	43	0	0
150～299館	54	8%	36	18	0	50	8%	23	27	0	42	6%	27	15	0	39	7%	38	1	0
100～149館	45	7%	26	19	0	41	7%	14	27	0	34	5%	14	20	0	47	8%	28	19	0
70～99館	40	6%	19	21	0	46	8%	18	28	0	39	6%	20	19	0	32	6%	16	14	2
50～69館	62	9%	17	41	4	48	8%	11	37	0	51	8%	20	29	2	42	7%	22	16	4
30～49館	73	11%	25	37	11	65	11%	23	29	13	64	10%	10	47	7	55	10%	28	15	12
10～29館	159	24%	18	42	99	117	19%	11	43	63	169	26%	19	45	105	125	22%	42	21	62
2～9館	153	23%	14	15	124	170	28%	13	28	129	198	30%	14	28	156	194	34%	13	18	163
公開本数合計①	**673**		**234**	**201**	**238**	**604**		**172**	**227**	**205**	**656**		**178**	**208**	**270**	**577**		**230**	**104**	**243**
			35%	30%	35%			28%	38%	34%			27%	32%	41%			40%	18%	42%
49館以下で公開された作品本数	385					352					431					374				
うちミニシアターのみでの上映作品	234	**61%**				205	**58%**				268	**62%**				237	**63%**			
その他（東京1館のみでの公開など）	113					84					86					73				
日本映画公開本数合計②	**786**					**688**					**742**					**650**				

外国映画

公開館数	2025		シネコンのみ	シネコン+ミニシアター	ミニシアターのみ	2024		シネコンのみ	シネコン+ミニシアター	ミニシアターのみ	2023		シネコンのみ	シネコン+ミニシアター	ミニシアターのみ	2019		シネコンのみ	シネコン+ミニシアター	ミニシアターのみ
300館以上	29	4%	26	3	0	34	5%	31	3	0	30	5%	29	1	0	32	6%	32	0	0
150～299館	28	4%	17	11	0	39	5%	26	13	0	26	4%	21	5	0	18	4%	16	2	0
70～149館	87	12%	29	56	2	78	11%	15	63	0	66	10%	13	53	0	42	8%	17	23	2
50～69館	90	12%	21	64	5	84	12%	7	75	2	81	13%	6	73	2	33	6%	3	20	10
30～49館	147	20%	8	105	34	112	16%	1	83	28	123	19%	5	84	34	97	19%	4	44	49
10～29館	225	31%	13	92	120	206	29%	10	90	106	243	38%	30	72	141	174	34%	25	27	122
2～9館	130	18%	8	21	101	158	22%	2	16	176	65	10%	4	14	47	118	23%	17	9	92
公開本数合計①	**736**		**122**	**352**	**262**	**711**		**92**	**343**	**312**	**634**		**108**	**302**	**224**	**514**		**114**	**125**	**275**
			17%	48%	36%			13%	48%	44%			17%	48%	35%			22%	24%	54%
49館以下で公開された作品本数	502					476					431					389				
うちミニシアターのみでの上映作品	255	**51%**				310	**65%**				222	**52%**				263	**68%**			
その他（都内1～2館での上映など）	88					53					89					128				
外国映画公開本数合計②	**824**					**764**					**723**					**642**				
日本映画①＋外国映画①	**1409**		**356**	**553**	**500**	**1315**		**264**	**570**	**517**	**1290**		**286**	**510**	**494**	**1091**				
			25%	39%	35%			20%	43%	39%			22%	40%	38%					

2024年に大きな注目を集めたドキュメンタリー映画『どうすればよかったか?』は、2025年も上映が続き、シネコンにまで拡大、公開館は130館を越えている。日本の公立小学校の子どもたちの生活を描き、海外で注目を集めたドキュメンター『小学校 それは小さな社会』(24/12月)、児童養護施設で暮らす子どもたちの日常に密着した『大きな家』(24/12月)といった作品は、映画ファンに止まらない幅広い層の観客を得ている。

2025年の日本映画公開作品の新しい傾向として、デジタルリマスター版の公開(リバイバル)が非常に増えた(2024年19本→2025年40本)ことがある。コロナ禍後、この傾向は、外国映画ではすでに顕著になっていたが、2025年は日本映画でも、『リンダリンダリンダ』(2005)、『Love Letter』(1995)、『呪怨』『呪怨2』(2000)、『狂い咲きサンダーロード』(1980)、『お引越し』(1993)『夏の庭』(1994)といった作品の4Kリマスター版が公開されて話題を集めた。アニメーション映画でも「新世紀エヴァンゲリオン劇場版」2作品(1997)、「エヴァンゲリヲン新劇場版」2作品(2007/2009)、「デビルマン」2編(1987/1990)、押井守監督の『GHOST IN THE SHELL 攻殻機動隊』(1996)『イノセンス』(2004)、宮崎駿監督『もののけ姫』(1997)などがデジタルリマスター版で次々に公開され、多くのアニメーションファンを集めている。特集上映の巡回(配給)も増えている。

fig.12　2025年に公開された映画の分類

日本映画	2025	2024	2023	2019
一般映画新作(劇映画)	369	344	384	380
一般映画新作(アニメーション)	80	63	93	94
ドキュメンタリー	99	89	84	71
ODS	30	53	23	32
旧作デジタルリマスター版	40	19		
特集上映(旧作デジタルリマスター版含む)	55	36	72	
日本映画合計①	**673**	**604**	**656**	**577**
上記の他、公開館数1館(短篇・若手・その他)	113	84	86	73
日本映画合計②	**786**	**688**	**742**	**650**

外国映画	2025	2024	2023	2019
一般映画新作(劇映画)	324	333	304	330
一般映画新作(アニメーション)	30	32	25	16
ドキュメンタリー	62	53	55	55
ODS	71	43	53	47
旧作デジタルリマスター版	107	66	43	35
特集上映(旧作デジタルリバイバル)41企画(2024)	142	184	154	31
外国映画合計①	**736**	**711**	**634**	**514**
上記の他、1館(あるいは2、3館)のみでの上映	88	53	89	128
外国映画合計②	**824**	**764**	**723**	**642**
日本映画①+外国映画①	**1409**	**1315**	**1290**	**1091**

外国映画

外国映画は、2025年は736本が公開されている。外国映画が不調と言われる中でも、多くの配給会社によって様々な国の多様な作品が配給された。ジャンル別では、劇映画の新作が324本(9減)、アニメーション30本(2減)、ドキュメンタリー62本(9増)、ODS71本(28増)、特集上映(旧作のデジタルリマスター版含む)が249本(1減)で、公開作品全体の34%を占めている。前述のように、2025年、外国映画で最もヒットしたのは『ミッション:インポッシブル ファイナル・レコニング』(52.8億円)で、8月に公開された『ジュラシック・ワールド 復活の大地』が49.0億円となっている。ほかには特に目立ったヒット作品はなく、興収10億円以上の作品は12作品に留まっている。

とはいえ、アカデミー賞を受賞したポール・トーマス・アンダーソン監督『ワン・バトル・アフター・アナザー』、ショーン・ベイカー監督『ANORA』、ポン・ジュノ監督『ミッキー17』、アリ・アスター監督『エディントンへようこそ』、ウェス・アンダーソン監督『ザ・ザ・コルダのフェニキア計画』といった作家の作品や、ティモシー・シャラメの熱演が話題となった『名もなき者 A COMPLETE UNKNOWN』(24/12月)、ブラッド・ピットの魅力全開の『「F1/エフワン」、ミニシアター中心の公開ながら大ヒットとなった『教皇選挙』など、映画ファンの心を掴む作品も数多く公開されている。コロナ禍後の、外国映画新作の低迷傾向は続いているといわれるが、ミニシアターとシネコン両方で公開されることでより多くの観客を集める可能性をもつ作品は増えているように思われる。

ミニシアターを中心に公開されるヨーロッパ映画やアジア映画が集客に腐心する中、香港で歴代第一位を記録した『トワイライト・ウォリアーズ 決戦!九龍城砦』は、公開後、徐々に熱烈なファンを獲得、5億円を越える大ヒットとなった。

ハリウッド以外のアニメーションでは、中国の『羅小黒戦記2 ぼくらが望む未来』が200館を越える公開となったほか、大作以外のアニメーションでは、ミニシアターを中心に公開された『Flow』、新潟国際アニメーション映画祭で受賞した『かたつむりのメモワール』や『パフィンの小さな島』などが話題を集めた。

ドキュメンタリーは62本が公開された。女性に関わる2つのドキュメンタリー映画が注目を集めた。『女性の休日』(10月)は、1975年、アイスランドで行われた女性たちが職場や家庭の仕事を放棄したストライキ「女性の休日」を題材とするドキュメンタリーで、公開されるや共感の輪が広がり、映画館以外でも多くの会場で上映されている。もう1本は、映像ジャーナリストの伊藤詩織が、自身の受けた性暴力について調査に乗りだす姿を記録したドキュメンタリー『Black Box Diaries』。12月に1館のみで公開、瞬く間に50館を越える映画館に広がっている。

2025年もジャズ、ロック、クラシックなど幅広いジャンルの音楽系のドキュメンタリーが多く公開された。ミシェル・ルグランやハンス・ジマーといった映画音楽の巨匠のドキュメンタリーが映画ファンを喜ばせている。

イランの名匠モフセン・マフマルバフ監督とハナ・マフマルバフ監督がアフガニスタンとイスラエルで撮った2作品(『子どもたちはもう遊ばない』『苦悩のリスト』24/12月)、ワン・ビン監督の「青春三部作」(4月)といった重要な作品もミニシアターを中心に上映されている。

2026年2月、ドキュメンタリー映画の巨匠フレデリック・ワイズマン監督の訃報が届き、世界中の映画作家、映画ファンがその死を悼んだ。

コロナ禍の2020年以降に顕著な傾向として旧作のリバイバル公開、特集上映が非常に増えているということがある。2025年も100本を越える旧作のデジタルリマスター版が公開され、30を越える特集上映が行われている。

デジタルリマスター版のリバイバル公開では、『アバター』(2009)と『アバター ウェイ・オブ・ウォーター』(2022) が新作の公開に合わせて公開され、『バック・トゥ・ザ・フューチャー』(1985)がIMAXで上映され、『ロード・オブ・ザ・リング 王の帰還 スペシャル・エクステンデッド・エディション』(2005)、『ターミネーター』(1984)といった大作が公開され、80~2000年代のミニシアター系のヒット作『バグダッド・カフェ』(1987)、『グラン・ブルー 完全版』(1988)、『新ドイツ零年』(1991)、『デリカテッセン』(1991)、『冬冬の夏休み』(1984)、エドワード・ヤンの『カップルズ』(1996)『ヤンヤン 夏の想い出』(2000)、『ONCE ダブリンの街角で』(2006)といった作品が次々に公開され、12月には、満を持してレオス・カラックスの『ポンヌフの恋人』が上映され、多くの観客を集めた。また、長らく「幻の映画」とされてきた『落下の王国』(2006)のデジタルリマスター版が11月に公開され、“目も眩むほどに美しい圧巻の〈映像詩〉的アート体験”が話題となり、公開24日間で2億円を超える興行収入を記録する異例のヒットとなった。

さらに、『天国の日々』(1978)、『バッドランズ』(1973)、『パピヨン』(1973)といった長らくスクリーンで見ることができなかった作品のデジタルリマスター版が公開されている。

また、2025年は30企画を越える特集上映が組まれ、140本を越える映画が上映された。

旧作の特集上映が盛んに行われるという現象は、日本特有のものではなく、ヨーロッパや韓国、台湾等でも同様であるが、東京で行われる特集上映の多彩さは世界的にも群を抜いており、これが、コロナ後の映画館で若い観客を拡大する一助ともなっているようである。

2025年の主な特集上映

〈外国映画〉

スティーヴン・スピルバーグ IMAX映画祭
ルネ・ラルー ファンタスティック・コレクション
ショーン・ベイカー初期傑作選
《北欧の至宝》マッツ・ミケルセン生誕60周年祭
映像詩人アルベール・ラモリスの知られざる世界
オスロ、3つの愛の風景
オリヴェイラ2025 没後10年 マノエル・ド・オリヴェイラ特集
サタジット・レイ　レトロスペクティブ2025
ラウラ・シタレラ監督特集
メーサーロシュ・マールタ監督特集　第2章
ペドロ・コスタ はじまりの刻 1989-1997
ネリー・カプラン　レトロスペクティヴ
ジャック・ロジエ監督特集
特集「男と女-クロニクルズ」
台湾巨匠傑作選2025
アメリカ黒人映画傑作選
特集「ミゲル・ゴメス アーリーワークス」
映画監督チャン・ゴンジェ 時の記憶と物語の狭間で
ベルトラン・マンディコ特集　ピンク・ネオン・アポカリプス
ペルー映画祭 vol.3

興行収入10億円を越える映画／10億円以下の映画

2025年、興行収入10億円を越えた映画は日本映画38本、外国映画12本の50本（2024年41本、2019年65本）であった。本数では全公開本数1305本の3.8%、興行収入では、日本映画約1672.2億円、外国映画350.5億円で合計2022.7億円となり、全興行収入の73.7%（2024年62.9%、2019年76.9%）を占め、前年を10%以上、上回っている。

→fig.13, 14, 15, 16, 17

fig.14　2025年興行収入10億円以上作品［外国映画］

順位	公開月	作品名	興行収入（億円）	ジャンル	配給会社
1	5月	ミッション：インポッシブル ファイナル・レコニング	52.8	劇映画	東和ピクチャーズ
2	24/12月	モアナと伝説の海2	51.7	アニメーション	WDS
3	8月	ジュラシック・ワールド 復活の大地	49	劇映画	東宝東和
4	4月	マインクラフト ザ・ムービー	39.4	劇映画	WB
5	3月	ウィキッド ふたりの魔女	35.4	劇映画	東宝東和
6	6月	リロ&スティッチ	33.9	劇映画	WDS
7	24/12月	ライオン・キング：ムファサ	22.5	劇映画	WDS
8	6月	F1/エフワン	21.3	劇映画	WB
9	3月	教皇選挙	11.5	劇映画	キノフィルムズ
10	2月	キャプテン・アメリカ：ブレイブ・ニュー・ワールド	11.4	劇映画	WDS
11	5月	サンダーボルツ*	11.3	劇映画	WDS
12	7月	スーパーマン	10.3	劇映画	WB
		合計	350.5		

—「日本映画産業統計」（日本映画製作者連盟）参照

fig.13　2025年興行収入10億円以上作品［日本映画］

順位	公開月	作品名	興行収入（億円）	ジャンル	配給会社
1	7月	劇場版「鬼滅の刃」無限城編 第一章 猗窩座再来	391.4	アニメーション	東宝/アニプレックス
2	6月	国宝	195.5	劇映画	東宝
3	4月	名探偵コナン 隻眼の残像（フラッシュバック）	147.4	アニメーション	東宝
4	9月	劇場版『チェンソーマン レゼ篇』	104.3	アニメーション	東宝
5	24/12月	はたらく細胞	63.6	劇映画	WB
6	8月	劇場版『TOKYO MER〜走る緊急救命室〜南海ミッション』	52.9	劇映画	東宝
7	8月	8番出口	51.7	劇映画	東宝
8	3月	映画ドラえもん のび太の絵世界物語	46.1	アニメーション	東宝
9	24/12月	映画「グランメゾン・パリ」	42	劇映画	東宝/SPE
10	1月	機動戦士Gundam GQuuuuuuX -Beginning-	36.2	アニメーション	東宝/バンダイナムコフィルムワークス
11	24/12月	劇場版 忍たま乱太郎 ドクタケ忍者隊最強の軍師	33.5	アニメーション	松竹
12	24/12月	劇場版ドクターX	32.8	劇映画	東宝
13	10月	爆弾	31.6	劇映画	WB
14	2月	ファーストキス 1ST KISS	28.8	劇映画	東宝
15	2月	映画 ヒプノシスマイク -Division Rap Battle-	26.4	アニメーション	TOHO NEXT
16	1月	366日	25.8	劇映画	SPE/松竹
17	9月	ブラック・ショーマン	24	劇映画	東宝
18	8月	映画クレヨンしんちゃん 超華麗！灼熱のカスカベダンサーズ	23.6	アニメーション	東宝
19	10月	秒速5センチメートル	23	劇映画	東宝
20	4月	#真相をお話しします	21.2	劇映画	東宝
21	11月	劇場版 呪術廻戦「渋谷事変 特別編集版」×「死滅回游 先行上映」	20.9	アニメーション	東宝
22	2月	劇場版「トリリオンゲーム」	20.5	劇映画	東宝
23	5月	劇場版うたの☆プリンスさまっ♪TABOO NIGHT ××××	19.8	アニメーション	松竹
24	6月	ドールハウス	19.1	劇映画	東宝
25	6月	フロントライン	17.1	劇映画	WB
26	11月	TOKYOタクシー	16.5	劇映画	松竹
26	11月	栄光のバックホーム	16.5	劇映画	GAGA
28	1月	アンダーニンジャ	15.9	劇映画	東宝
29	8月	近畿地方のある場所について	15.6	劇映画	WB
30	1月	劇場版プロジェクトセカイ 壊れたセカイと歌えないミク	15	アニメーション	松竹
31	11月	MGA MAGICAL 10 YEARS ANNIVERSARY LIVE 〜FJORD〜 ON SCREEN	14.2	ODS	TOHO NEXT
32	10月	『もののけ姫』4Kデジタルリマスター	12.8	アニメーション	東宝
33	9月	映画キミとアイドルプリキュア♪ お待たせ！キミに届けるキラッキライブ！	12	アニメーション	東映
34	6月	KING OF PRISM -Your Endless Call- みーんなきらめけ！プリズム☆ツアーズ	11.8	アニメーション	エイベックス・フィルム レーベルズ
35	9月	沈黙の艦隊 北極海大海戦	11.5	劇映画	東宝
36	3月	35年目のラブレター	10.8	劇映画	東映
37	1月	劇映画 孤独のグルメ	10.3	劇映画	東宝
38	7月	事故物件ゾク 恐い間取り	10.1	劇映画	松竹
		合計	1672.2		

—「日本映画産業統計」（日本映画製作者連盟）参照

fig.15　2025年興行収入上位20作品

順位	公開月	作品名	興行収入（億円）	ジャンル	日本映画/外国映画	配給会社
1	7月	劇場版「鬼滅の刃」無限城編 第一章 猗窩座再来	391.4	アニメーション	日本映画	東宝/アニプレックス
2	6月	国宝	195.5	劇映画	日本映画	東宝
3	4月	名探偵コナン 雙眼の残像（フラッシュバック）	147.4	アニメーション	日本映画	東宝
4	9月	劇場版『チェンソーマン レゼ篇』	104.3	アニメーション	日本映画	東宝
5	24/12月	はたらく細胞	63.6	劇映画	日本映画	WB
6	8月	劇場版『TOKYO MER～走る緊急救命室～南海ミッション』	52.9	劇映画	日本映画	東宝
7	5月	ミッション：インポッシブル／ファイナル・レコニング	52.8	劇映画	外国映画	東和ピクチャーズ
8	8月	8番出口	51.7	劇映画	日本映画	東宝
9	24/12月	モアナと伝説の海2	51.7	アニメーション	外国映画	WDS
10	8月	ジュラシック・ワールド／復活の大地	49	劇映画	外国映画	東宝東和
11	3月	映画ドラえもん のび太の絵世界物語	46.1	アニメーション	日本映画	東宝
12	24/12月	映画「グランメゾン・パリ」	42	劇映画	日本映画	東宝/SPE
13	4月	マインクラフト／ザ・ムービー	39.4	劇映画	外国映画	WB
14	1月	機動戦士Gundam GQuuuuuuX -Beginning-	36.2	アニメーション	日本映画	東宝/バンダイナムコフィルムワークス
15	3月	ウィキッド ふたりの魔女	35.4	劇映画	外国映画	東宝東和
16	6月	リロ&スティッチ	33.9	劇映画	外国映画	WDS
17	24/12月	劇場版 忍たま乱太郎 ドクタケ忍者隊最強の軍師	33.5	アニメーション	日本映画	松竹
18	24/12月	劇場版ドクターX	32.8	劇映画	日本映画	東宝
19	10月	爆弾	31.6	劇映画	日本映画	WB
20	2月	ファーストキス 1ST KISS	28.8	劇映画	日本映画	東宝
		合計	**1520**			

2025年興行収入	**2744.5**
2025年興行収入10億円以上作品	**2022.7**
興行収入10億円以上作品の割合	73.7%

fig.16　興行収入10億円以上の作品/興行収入10億円未満（2025）

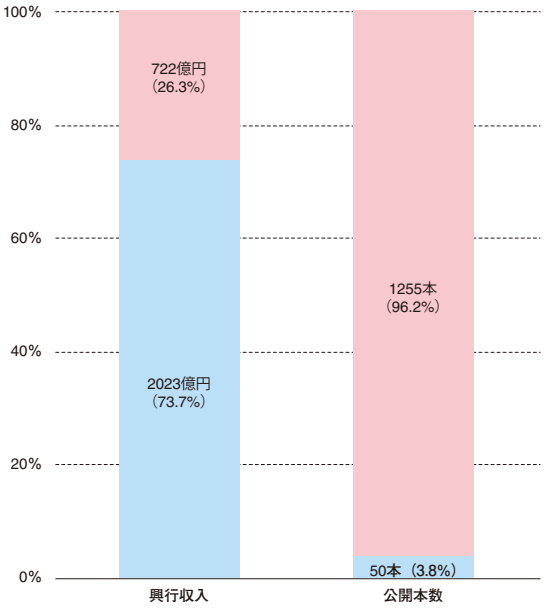


fig.17　興行収入10億円以上の映画/興行収入10億円未満の映画（2016-2025）

興行収入（億円）

		10億円以上		10億円未満	
	全体	興収	割合	興収	割合
2016	2,355	1,763	74.9%	592	25.1%
2017	2,286	1,618	70.8%	667	29.2%
2018	2,225	1,563	70.2%	662	29.8%
2019	2,611	2,009	76.9%	602	23.1%
2020	1,433	912	63.7%	521	36.3%
2021	1,619	1,006	62.2%	613	37.8%
2022	2,131	1,532	71.9%	599	28.1%
2023	2,215	1,463	66.1%	752	33.9%
2024	2,070	1,303	62.9%	767	37.1%
2025	**2,745**	**2,023**	**73.7%**	**722**	**26.3%**

公開本数

		10億円以上		10億円未満	
	全体	本数	割合	本数	割合
2016	1149	61	5.3%	1088	94.7%
2017	1187	62	5.2%	1125	94.8%
2018	1192	54	4.5%	1138	95.5%
2019	1278	65	5.1%	1213	94.9%
2020	1017	25	2.5%	992	97.5%
2021	959	37	3.9%	922	96.1%
2022	1143	41	3.6%	1102	96.4%
2023	1232	49	4.0%	1183	96.0%
2024	1190	41	3.4%	1149	96.6%
2025	**1305**	**50**	**3.8%**	**1255**	**96.2%**

—fig. 16, 17ともに「日本映画産業統計」（日本映画製作者連盟）参照